

② 「私と日本語」

作文例①

「一段落目」自分にとって日本語はどんな存在か、簡潔に示す。

(例)

日本語が自分にとってどんな存在かなんて、普段の生活の中で考えることはない。でも、外国で、外国人の中にいるとよく分かる。それは、「僕が日本人である根拠」だ。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

もちろん、「日本人である根拠」といったら、普通は国籍というものになるんだろう。でも、いくら国籍が日本だからといって、外国の言葉を話し、日本語が話せなかったら、周りから日本人だと思われないような気がする。自分でも、自分のことを日本人だと考えることとはできないんじゃないだろうか。逆に、外国籍の人でも、その人が普通にペラペラと日本語の話し言葉を話していたら、国籍を聞かない限り、僕はその人を日本人だと思うだろう。いや、外国籍だと聞かされても、やっぱり日本人、少なくとも日本民族ではあるんじゃないかと考える。僕には台湾人と日本人のハーフの友人が何人かいるが、日本語を話している彼らは、やはり日本人にしか見えない。僕も、日本語を話しているからこそ日本人なんだと思う。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

それぞれの国には、それぞれの国民性とか民族性とか言われるものがある。それは、簡単に言えば文化の違いというやつで区別されるんだろう。文化の違いは、歴史や地理の違いによつて異なるのだろうが、それ以上に言葉の違いが大きな文化の違いを生んでいると思う。なぜなら、人間は言葉を使って考えるし、言葉を使って人とコミュニケーションをとるからだ。

僕は小学校の時から台湾に住んでいて、中国語と英語を少し勉強してきたので、それらの言葉と比べた日本語の特徴が少し分かる。今僕は自分のことを「僕」と書いているが、友だちの前では「俺」を使っている。父は、家では自分のことを「お父さん」と言っているが、外では「私」と言っている。中国語なら、僕も父も自分を「我」と言うし、英語なら「I」と言う。とてもシンプルだ。また、日本語には敬語が多い。「です」「ます」だけでなく、尊敬語や謙譲語とがあり、同じ「見る」でも、尊敬語なら「ご覧になる」、謙譲語なら「拝見する」と言う。僕は敬語はあまり使えていないので、偉そうなことは言えないのだが、少なくとも中国人やアメリカ人よりは、仲間内の言葉と外向けの言葉の区別を気にしている。これは、中国人やアメリカ人と比べた日本人のキヤラクターに、大きな特徴を持たせていると思う。他にも日本語には、英語や中国語と違って動詞が文の最後の方に来るとか、擬音語や擬態語が多いとか、平仮名・片仮名・漢字という三種類の文字があるといった特徴がある。

「四段落目」結論・まとめ

(例)

日本語を使っているからこそ、僕の性格や考え方は日本的になっていく。日本語は、僕にとって、僕が日本人になるためのDNAみたいなものじゃないだろうか。